九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ジッドの結婚生活について今なにを語りうるか : サラ・オーセイユ『マドレーヌ・ジッド』

吉井, 亮雄
九州大学文学部

https://doi.org/10.15017/9956

出版情報：Stella. 13, pp.95-108, 1994-03-10. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

LECTURES GIDIENNES・1

ジッドの結婚生活について今なにを語りうるか
——サラ・オーセイユ『マドレーヌ・ジッド』

吉　井　亮　雄

近現代のフランスにおいて，おそらくジッドほど実人生と創作とが分かちがたく結びついた作家はいないのではないか。なるほど，ただ単に自伝的要素を創作の素材として利用したということだけならば，程度の差はあれ，あらゆる作家についていえることだろう。だが，利用の多寡が問題なのではない。ジッドが文学史上固有の地位を主張しうるのは，ある文学的戦略を早くから選択し，以後ゆらぐことなくそれを実践しつづけたからだ。すなわち，自己を禁忌とする逆説的なナルシシスムを育み，これに縛られ導かれて，ついには嫌悪と執着とが混淆し，現実と虚構とが分別しがたい自伝空間を生きる，そして行為と書物とが捩れあい織りなす「生」の総体そのものをひとつの「作品」として提示する，という戦略である。必然的に，この作家を論ずるばあい，伝記的・実証的事実という差異指標の参照を忌避し，ことさらテクストの独自性を言い立てることにさほどの意義があるとは思われない。じっさい，あくまで掩蔽されつづける主体＝主題と，そのまわりに執拗に築かれる言説や行為とのあいだに成立する，虚実とりまぜたドラマじたいがすでに異様なほど豊饒であるのにたいし，純然たるテクストロジーから導きだされた「複数的解釈」のほうがむしろ逆に制限的・図式還元的で，厚みと魅力に欠けるという皮肉な例はけっして稀ではない。

ジッドがはじめは親しい従弟として，つづいては配偶者としてマドレーヌと結んだ関係の重要性については，もはや贅言を要すまい。とりわけ作家活動期間の大半をカバーする結婚生活は，時間的な長さからばかりか，性的交渉をともなわぬ「白い結婚」をはじめとするその特異な形態からも，われわれの関心をつよく引きつけてやまない問題である。しかしながら時の流れのなかで紡がれ，またほどけていく夫婦関係の機微は，ほんらい外部からは容易にうかがい知れないものだ。ジッド夫妻のばあいもけっしてその例外ではなく，物理的な

制約による情報の不足や偏りが実態の具体的な把握をはばんでいる。最大の障壁は，青年期から日々かわされ，公刊されていれば決定的な資料となったにちがいない2人の往復書簡の大部分が事実上参照不可能であることだろう。つまり，少なく見つもっても千通以上と推定されるジッド書簡は，1918年6月，夫が同性愛の相手マルク・アレグレ青年とイギリスに旅立ったことに絶望した妻の手によってすべて焼きすてられてしまったし，量的にほぼ同等のマドレーヌ書簡のほうも，複雑な事情がからんで，ある時期からはほとんど門外不出の状態がつづいているのである[1)]。結婚生活についてはしばしばスキャンダラスな側面ばかりが強調されてきた嫌いがあるだけに，また母ジュリエットにかんしてジッド自身が後年の回想で意識的に戯画化し，一般にも長いあいだひとつの神話として流通していた，過度に厳格で権力的という母親像が，数年前に出版された当事者間の往復書簡集によってはじめて本来の姿に修正されたという確固たる実例があるだけに[2)]，夫妻の日常を証すべき一次資料をめぐるこの現状はまことに残念なことといわなければならない。

ジッドの日記も，こと結婚生活にかんしては多くを期待できない。もともと公刊された『日記』からは夫婦間の軋轢・懊悩などを述べた部分はすべて意識的に削除されていたが，のち『今や彼女は汝のなかにあり』によって公にされた記述にしても，晩年の妻のイメージがしばしば母のそれと重ねあわされていることから窺われるように，夫側の自己弁護的な色彩を否定できないのである。またマドレーヌの日記も存在するが，後述するように，これは結婚前の短い期間に限定されたもので，夫婦生活とは直接には関係がない[3)]。さらに，マルタン・デュ・ガールの『アンドレ・ジッドにかんする覚え書』，マリア・ヴァン・リセルベルグの『プチット・ダムの手記』など[4)]，親しい知人の記録や証言もそれなりに具体的な情報をもたらしてくれるが，結局はいずれも夫婦関係の実態を謎といぶかるだけで，決定的な資料と呼ぶにはほど遠い。くわえて，ジッドの没後まもなく立てつづけに発表された2つの著書も，問題を十分に検討したとはとうてい認めがたい。まず，「物語」と銘うたれたマックス・マルシャンの『かけがえのない夫，あるいはアンドレ・ジッドの夫婦生活』(1955年）は，全体としては，すでに流布していたスキャンダラスな，あるいは戯画化された伝聞情報を活字化したものといってよく，今日ではもはや受容史・批評史における挿話的な価値しかもたない[5)]。これにつづいたのが『マドレーヌとアンドレ・ジッド』(1956年）である。周知のように，マルシャンの独断的な言説がそれなりの影響を一般に及ぼすことをおそれたジャン・シュラ

ンベルジェが，当時従事していたみずからの『全集』の編纂を中断して執筆したものだ[6]。たしかに同書は，マドレーヌの日記やジッド宛書簡からの抜粋によって，マルシャン前掲書にくらべれば格段に実証的な体裁をととのえはしたが，引用されたのは，カトリーヌ・ジッドから託された大量の一次資料のうちのごく一部分にすぎず，しかも，あわただしい執筆の経緯や，ジッド宛書簡を「この薄い紙束」と呼んでいる点から，著者が資料体の全貌を正確に把握していなかったことは明白で，その見解を参照するにあたってはつねに一定の留保が要求される。

こういった種々の否定的な材料が原因して，ジッドの結婚生活は，少なくとも新たな資料が発見・公刊されるまでは（しかもそれについて大きな期待はもてないのだが）危険な主題として，とりわけ実証的研究が主流を占めるフランス本国では敬遠されがちな状況がつづいていたのである。それだけに，マルシャン，シュランベルジェから4半世紀以上をへて，わが国の先駆的なジッド研究者・紹介者のひとりとして名高い新庄嘉章が果敢にもこの困難な主題にとりくんだことは特筆に値しよう。その著書『天国と地獄の結婚――ジッドとマドレーヌ』（1983年）の無駄のない引き締まった文体，臨場感あふれる描写の数々はさすがに見事といわねばならない[7]。だがその反面おしまれるのは，同書によって発掘・提示された新規情報が実質的に皆無であるということだ。新たな資料として『プチット・ダムの手記』をはじめ数点がくわえられてはいるが，それ以外の典拠は総じて古く，研究言説の参照にも偏りがみとめられ（たとえば，刊行当初から多くの事実誤認や不備が指摘され，その結果第1巻のみで中絶したピエール・ド・ボワデッフルの『アンドレ・ジッドの生涯』をしばしば引くいっぽう，実証的ジッド研究の第一人者クロード・マルタンの『アンドレ・ジッドの成年期』への言及がない），全体的には既知事項の整理にとどまったという印象をぬぐえない。その意欲的な試みにもかかわらず，ジッドの結婚生活をめぐる謎の多くは依然未解明のまま残されたのである。

*

以上のような事情・経緯があるだけに，このたびパリのロベール・ラフォン社から叢書「かつて彼女ありき」中の一点として出版されたサラ・オーセイユの『マドレーヌ・ジッド』はまさに興味津々の一書といえよう[8]。はたして本書は，研究上の空隙を埋め，われわれの期待に応えてくれるのだろうか。

著者オーセイユは文学の教授資格を取得しているということだが，少なくともジッド研究においては本書がはじめての業績である。その経歴等については，残念ながら筆者はなにひとつ知るところがない。いっぽう，標題紙著者名欄に彼女とならんで，「その回想によって」本書の成立に参与したと記されているジャック・ドルーアンについては，のちの論述を容易にするためにも，ここで簡単な紹介をしておこう。彼は，ジッドやシュランベルジェ，コポーらとともに「新フランス評論」を共同創刊したマルセル・ドルーアン（筆名ミシェル・アルノー）と，マドレーヌのすぐ下の妹ジャンヌとのあいだに，ドミニクにつぐ次男として，1908年にパリで生まれた。ジッド夫妻にとっては甥にあたる。とくにマドレーヌにとっては血のつながった甥で，本書裏表紙に記されたように，「まさにマドレーヌの精神的な息子と自認しうるほど，最後の20年間は彼女と親しく交わり，彼女を心から敬愛した」人物である。ちなみに1977年には，国際学会的な性格の強い「ジッド友の会」（本部はリヨン第2大学ジッド研究センター）の名誉会員に推されている。さらに余談ながら，筆者は1986年2月に知人を介してこの人物と歓談する機会をもった。当時すでに80歳に手がとどこうという高齢であったが，事柄の細部について彼の記憶はしばしば鮮明かつ正確で，こちらの用意していた質問にたいし，つぎつぎと記憶の糸をたぐりながら返答する頭脳の若々しさ，さまざまなエピソードを交えた洒脱な話ぶりにはとりわけ驚かされた。マドレーヌの実像が悪意ある中傷や憶測によって極端に歪められていると強く訴えていたこと，虚像の伝播流布を傍観し，ある意味ではその定着化に加担してきたとして研究者，とくにフランスの実証的研究者にたいする不信を隠さなかったことも印象に残る。

さて，本書の叙述部分は全部で310頁ほどだが，章立ては長いものでも20頁前後，短いものでは6頁と，比較的こまかく分割されており（全23章），その多くがそれぞれ生活のひとこまを描くのに充てられている。ここには，特異点をつなぐことで夫婦関係の推移を描くのではなく，基本的には穏やかに過ぎゆく日常を浮きぼりにしようという著者の意図を見るべきであろう。じっさい，厳密な年代記述は意識的に省かれ，同時にキュヴェルヴィルの家や周囲の叙景がしばしば大きな位置をしめる。たとえば，「周遊路」と題された第6章はつぎのようにはじまる——

外では杉の樹が，暗い葉陰を真珠色に光らせる氷晶の重みをうけながら，ほとんど枝をたわませもせずに立っている。樹は夜どおし呻き声をあげていた。嵐が，突風を

鳴りひびかせ，またその止み間にも不満げな風音を残して，枝々を荒っぽく揺さぶっていたのだ。まるで満ち潮で岸に押し返されるエトルタの浜砂利の音のようだった。(75頁)

あるいはまた，第11章「ノルマンディーのバラ」の冒頭——

マドレーヌは，剪定ばさみを手に，バラの木を見てまわる。10月は剪定に適した時期だ。この夏アンドレと彼女がイタリアを再訪したさい，夫は，9月にぎっしりとたくさんの緋色の花をつける美しいツルバラをもって帰るといってきかなかった。だから彼女は今，春にはふたたび勢いよく芽をふくように，木の節目よりも上の，花がついた枝を切りおとすのに丹念に励んでいるのだ。(117頁)

このように全体としては緩やかに日常生活が描かれていくが，それでも本書は，マドレーヌの人生を大きく揺さぶったものとして，いくつかの事件をとりあげざるをえない。すなわち，まずは母マチルドの不貞と出奔である。この事件は，わずか15歳の少女を否応なく家長の地位につかせ，それによって彼女を早熟な大人へと急速に変貌させていく。同時に，ジッドからの求婚を10年の長きにわたって拒みつづけさせた原因のひとつともなったのである。すでに触れた，夫とアレグレ青年との同性愛関係の発覚が，これにつづく第2の事件である。それまで夫とのあいだに積み上げられてきた愛の証をすべて焼きすてたマドレーヌの絶望的行為にたいし，ジッドの悲嘆も尋常ではなかった。にもかかわらずこの夫は，男色弁護の書『コリドン』の出版によって，みずからの性向を弁護せざるをえなかったのである。さらに本書は第3の事件として，自分とは肉体関係を結ぶことのなかった夫がマリア・ヴァン・リセルベルグの娘エリザベートとのあいだに女児をもうけたという知らせがマドレーヌを打ちのめしたと主張している。前2件については従来の実証的知見に照らしても妥当な選択といえようが，最後のものについては本書独自の見解によるものなので，のちに詳しく検討したい。いずれにせよ，どの苦難の時期もやがては諦観と慈愛によってのりこえられ，最晩年にいたって彼女にはついに平穏でゆるぎない境地が訪れたというのが本書の大筋である。

叙述のスタイルからもすでにあきらかだが，本書の体裁は学術書のそれとは対極的である。付注の類いはわずかに4つのみ，出典表記さえごく稀に作品名を挙げるだけで，書誌や索引も備えないというように，通常の学的装置は徹底して排除される。このため情報の典拠にかんし厳密な区分をすることは容易で

はないが，おそらくドルーアン証言には依存していない，本書の大半を占める部分については，筆者の目についたかぎりでも事実に反する記述が少なくない。例として，そのいくつかを箇条書きふうに挙げれば——

＊ 1890年，マドレーヌは最愛の父エミール・ロンドーを亡くす。その喪の日々を描いた部分では，「だれからの手紙にも返事をださず」，「4月，5月，6月，7月……と」遺品の整理に没頭していた彼女は「そこに未使用の2冊の手帳を見いだす。突然こらえがたい心の痛みに襲われた彼女は，机につき，書きに書く，もはや彼女の書いたものを読むことはできないこの父に宛てて」(46頁）とあったのち，「1890年の暮になってようやく彼女は，この年で唯一のものとなる長い手紙を従弟〔ジッド〕に送る」(47頁）とつづく。すなおに文脈にしたがうかぎり，マドレーヌの日記は同年内に書かれたことになる。だが実際にはこの日記は，1冊目が1891年の1月から3月にかけてジロンド県アルカションで，また2冊目はその大半が同じ91年の7月から翌92年7月にかけてキュヴェルヴィルで書きつがれたもので，本書の記述はそれじたい不正確なばかりか，結婚以前のジッドとの関係についても年譜的に要らぬ誤解をまねきかねない。またエミールがこの世を去ったのは5月1日のはずで，「4月から遺品の整理」とは，いささか気が早すぎる。

＊「1894年12月，マドレーヌは〔自宅のあるルアンから〕パリにもどるが，短期間の滞在。というのは，北アフリカから帰ったばかりのアンドレが再びあわただしくかの地へ旅立とうとしていたからである」(95頁)。ジッドの生涯に決定的な刻印をのこすことになる初期の北アフリカ滞在に言及した一節だが，2つの旅行のあいだを占め，創作上も，また個人的な病理史・精神史においても大きな意味をもつスイス滞在にかんする記述が完全に欠落し，結果的にはいかにも過度の自我解放にたいする反動が存在しなかったかのような印象をあたえる。これでは，主題的に『地の糧』と陰陽の関係をなす『パリュード』(同月5日脱稿）の本来の姿も立ちあらわれてこない。

＊ 1905年をあつかった叙述において，「ジッドはパリとノルマンディーを行き来しながら『背徳者』の執筆をつづける。そして夜にはその一節を妻に読んで聞かせる」(138頁）と，作家の最重要作品のひとつ（1902年刊）にかんして信じがたいアナクロニスム。

＊ マドレーヌ宛書簡が焼きすてられた事件に関連する記述で，真相を知らされた「ジッドは夜を費やし，ゲオンやコポー，シュランベルジェ，マルタン・デュ・ガールに手紙を送って，ことの次第を報告することになる」(226頁)

とある。だが，すでに公刊された各往復書簡集を参照すれば容易に確認できるように，4日後（1918年11月25日）のシュランベルジェ宛に「君に会う必要が大いにある，しかもできるだけ長く」と，一件について相談を請う旨がほのめかされているだけで[9]，オーセイユのいうような事実は文献上存在しない。とりわけゲオンの名が引かれていることは，彼がカトリシスムに回心した1916年以降ジッドとのあいだに微妙な溝が生じていただけになおさら首を傾げざるをえない[10]。

＊「この1927年，ジッドはヴィラ・モンモランシーを去り〔…〕ヴァノー街の，ヴァン・リセルベルグ家と同じ階のアパルトマンに転居する」(280頁)。建築家ルイ・ボニエの設計にもとづき1904年半ばに着工され，翌々年一応の完成を見たオートゥイユの家がジッドの期待を大きく裏切るものだったことは周知だが，その所有期間については，アレグレ青年を同伴したコンゴ旅行の資金捻出のために1925年に売却されたとするものなど，研究者のなかにもまちがった記述をおこなうものが絶えない。正確なところは，売買契約の成立が1928年5月，ヴァノー街への転居が完了したのは同年の8月である。などなど……[11]。

以上は，単純に著者の不注意や学力不足に起因する誤記ないし不備といってさしつかえあるまい。だが，つぎのものはこれらとは少しばかり性格がことなる。問題にしたいのは，マドレーヌの死をあつかった箇所だ。1938年4月，ヴァノー街のアパルトマンに，キュヴェルヴィルからヴァランチーヌの電話でマドレーヌ危篤の報が入る。ジッドは朝一番の汽車に乗り，かろうじて妻の臨終に間にあった。そして，彼女とのあいだに以下のような会話が交わされたという——

「マドレーヌ……」
「なにもおっしゃらないで。あなたはおいでになるべきではなかったわ」
「しっ。わたしはもうここにいるのだからね。司祭を呼んでほしいかい」
「わたしがわたしたちの信仰〔プロテスタンチスム〕を捨てたとお思いなの？　わたしは，ただ神さまの前で自分のなしたことについて答えさえすればいいのよ」
「マドレーヌ，わたしを許してくれるかい？」
「なにを許せとおっしゃるの？　わたしにあたえられた取り分はとても割りのよいものだったのよ。わたしには，あなたの魂の最良の部分，子供の頃や青年の頃の優しさがあったのだから。そのうえ，生きると死ぬとにかかわりなく，わたしはあなたの晩年の魂とともにあることが分かっているのだし」(316－317頁)

夫は妻のそばを片時も離れず，この最後の一日をすごす。もはや彼女はことばを発せず，ただ夫を見つめ，そのことばに耳をかたむけ，ほほ笑みを浮かべるだけだ。だが，やがて今わのきわ，ひとこと「アンドレ……」と呟いて息をひきとった……。

事実であるならば，晩年のジッドの精神生活を考えるうえで，きわめて大きな意味をもつエピソードといえよう。しかしながらこの迫真の場景は，単なる誤認の次元をはるかにこえるところで作りだされた，まったくのフィクションなのである。ジッド自身の当時の証言を前にすれば，その虚構性は否定しがたい。すなわち，マドレーヌが身罷った翌日（4月18日），翻訳家ドロシー・ビュッシーに宛てた書簡で彼は，数日来シトレのイヴォンヌ・ド・レストランジュ宅に滞在していたが，前日の朝，電話で急遽キュヴェルヴィルに呼びもどされたこと，それに先立つ午前3時頃，妻が心臓発作をおこし，妹と姪とを枕元に呼びよせていたこと，さほど苦しまずにまもなく逝ったこと，かねてから自分には臨終に立ち会ってほしくないといっていたこと，などを報告しているのだ[12]。また，ひと月後に書かれ，のち『今や彼女は汝のなかにあり』に収められる文章にも，「彼女の訃報を受けてあわただしく帰ってきた」云々と，ほぼ同様の旨が記されているのである[13]。ちなみに，最期を見とった「妹と姪」とは，復活祭の休暇をすごすためにキュヴェルヴィルに来ていたロンドー家の次女ジャンヌとその娘オディール（ジャック・ドルーアンの母と妹）のことで[14]，ジッドに連絡をとったのもジャンヌであろうと推測される。いずれにしても三女ヴァランチーヌであったはずはない。なにしろこの2番目の妹はすでに同年2月，現世に別れを告げていたのであり，おそらくその末期の痛ましい苦悶こそがマドレーヌに，みずからの臨終には夫が立ち会わぬことを願わさせていたのだから……[15]。

批判的・否定的な言辞がつづいた。だが，ジッド学の実証的蓄積に親しんだ者にとっては注意さえ怠らなければ指摘しうる事実誤認や脚色を，欠陥として過大に考えるのはよそう。どのような史的著作も誤謬と無縁ではありえないのだし，とりわけこの種の「評伝」にあっては，臨場感を醸しだすための会話や場景の創出は――上記の例はたしかにいささか度がすぎるが――ある程度公認された手段ともいえるのだから。そして，本書も総体的に見れば，かぎられた紙幅のなかに少なからぬできごとをバランスよく，またほぼ事実どおりに描いているのだから。さらに率直にいえば，われわれが期待するのは，すでに実証的に確定した事項にかんするオーセイユの叙述やその想像力の豊かさなのでは

なく，あくまでもドルーアン証言にもとづく新規情報なのだから。学術性を意図していると否とにかかわらず，本書の評価は畢竟，それら新規情報の正否検討によって下されるべきなのである。

*

マドレーヌは生前，エリザベート・ヴァン・リセルベルグが1923年4月18日アヌシーで出産した女児の実父が自分の夫であることを，はたして知っていたのだろうか。2人の結婚生活における最大の謎のひとつである。シュランベルジェやマルタン・デュ・ガールら親しい友人への折々の告白によって，ジッドがマドレーヌ存命中，妻はすべて承知しているのではないかという疑念を払拭できないでいたこと，とりわけその死後は，この疑念がしだいに確信にかわっていったことは分かっているものの，マドレーヌ自身にかんしてはこれといった決定的な証拠・証言がなく，同時代人や研究者の下す推測もけっして一様ではない。それだけにこの一件にかかわる叙述が本書中もっとも注目すべき部分なのだが，それを検討するまえにまず，今日までの代表的な見解を略述しておこう。

マドレーヌは真相を知っていたとするのはマルシャン前掲書で，同書はその論拠として，カトリーヌ誕生の前年，彼女が昔から大切にしていたエメラルドの十字架を名付け子で，シュランベルジェの娘のサビーヌに与えたことを挙げている。つまり，この十字架のついた首飾りは，マドレーヌがジッドとの結婚をまだまったく意識していなかったころ，いつか従弟がだれかと結婚して女の子ができたときには，自分が名付け親となって与えようと思っていたものだが（その小説的転移は『狭き門』のなかに認められる），これをサビーヌに与えたのは，ジッドとエリザベートとの親密な関係を察知し，やがて生じるであろう忌まわしい結果にたいする予見的な否定行為だったとするのである[16)]。これにたいし，シュランベルジェ前掲書は，あくまで非断定的な立場を貫き，いずれの可能性もありうると説く。つまり，知らなかったのではないかと思わせる根拠としては，同じパリ・オートゥイユに在住し，生活文化環境がしばしばジッドのそれと重なっていたジャンヌやその夫マルセルさえ，マドレーヌの死後，ジッドがカトリーヌを養女にとったとき，まったく意外なこととひどく驚いたことから見て，キュヴェルヴィルにまで噂がとどいていたとは考えにくい点を挙げる。だが他方，手紙焼失事件のときにも夫に問いただされるまではその気

ぶりさえ窺わせなかったように，表面的には泰然自若を装おうとするマドレーヌの性格と強い自制力から判断すれば，真相を知っていながら表にあらわすことがなかっただけという可能性も十分に考えられる，と述べているのである[17]。さらに新庄前掲書は，マルシャン説をいかにも根拠薄弱として退けるいっぽう，シュランベルジェ論述の前半だけをとりあげ，これを同論述の結論としながら，カトリーヌの出生の秘密はマドレーヌも知らなかったのではないかという説に与しているのである[18]。

以上がこれまでに提出された代表的見解だが，そのいずれもが結局は，可能性の優劣判定のうえに立ち，あくまで推測であることをみずからの前提とせざるをえなかった。それにたいし本書の叙述は，マドレーヌは疑いなく真相を承知していたと断定するばかりか，これを裏付けるかのように目撃証人として数人の実名を挙げているのである。問題となる叙述は，彼女がジッドにむかって，非嫡出子を産んだエリザベートの自由奔放な生活信条に触れ，哀れみを口にする場面（257－259頁）ではじまるが，この場面じたいは『プチット・ダムの手記』に記録された夫婦間の会話にほぼ忠実にしたがって構成されている[19]。衝撃的なのは，それにつづく数頁だ。要約しよう――

アヌシーでカトリーヌが誕生した翌月，キュヴェルヴィルにはヴァレリーの娘アガトが逗留していた。ある晩，食事もすみ，客が自室にさがったので，マドレーヌは腰をおろし，その日とどいた郵便物に目をとおしはじめる。やがて手紙の束のなかに「友より」とだけ記された差出人不明の一通を見いだす。そこには，エリザベートが女児を出産したが，父親はジッドであると書かれていたのだ。たしかに思いあたるふしがある。衝撃をうけ茫然となった彼女は，夫の不実なことばを思いださせるもののない場所をもとめて，おぼつかぬ足どりで部屋をあとにする。階段をおり，玄関の扉をあける。「スマトラ」と名づけられたブナ林をまわって，畑に出る。突然，彼女は駆けはじめる。さまざまな思いが脈絡もなく頭に浮かんでは消える。なにもかもふり払わんとするかのように，彼女は走りつづける。だが，ついには倒れこんでしまう。夜が明けて，畑に出てきた小作人のサンドレとベルタンが彼女を発見する。大の字で地面に横たわり，身じろぎもせず両目を見ひらいた彼女は，２人が近づいてくるのにも気づかなかった。男たちに両腕を抱えられた惨めな帰宅。うちひしがれ，口もきけない彼女は，玄関のステップの下に，不安な面もちで自分を待っていた逗留客の姿をみとめる。アガトのほうでも，なんと話しかけてよいか分からず，ただ熱い紅茶をすすめることしかできない。小作人たちは恭しくひきさが

る（259－262頁）……。だが本書によれば，カトリーヌの出生をめぐる問題はこれで終わったわけではない。それから12年後のある日，マドレーヌはふたたび，少女の本当の父親はジッドだと断言する匿名の手紙を受けとる。今度の手紙はノルマンディーで投函されていた。噂が夫の暮らすパリにとどまらず，すでにキュヴェルヴィルのほうにまで伝わっていることに動転した彼女は，また独りあのブナ林に入っていく。そして8時間後，疲れきって姿をあらわした彼女は，たったひとりこの帰宅のさまを目撃した妹のジャンヌに，か弱くほほ笑むばかりだった（306頁）……。

この驚くばかりに生々しい場景をどのように判断すればよいのだろうか。たしかに先の例と同じく，ここでもただちにいくつかの疑問点・矛盾点を指摘することはできる。まずマドレーヌの常軌を逸した行動の細部は，オーセイユの叙述においてもだれひとり立ち会った者がいないものとして描かれているのだから，まったく根拠がないと見なさなければならない。さらに，時をへだてて届いた2通の匿名書簡にしても，じっさいに存在が確認されたものなのか否か，まったく不明である。シュランベルジェの証言によれば，最晩年のジッドはマドレーヌに秘密，あるいは噂の存在を暴露したとして「ある特定の人物の不作法」を非難していたというから[20]，これにもとづいて著者が独自に状況設定を創作したのだとも考えられる。したがって本書の叙述に依って，カトリーヌの出生の真相をマドレーヌが知っていたと即断するのはあまりに危険であろう。だがそのいっぽう，実子問題との因果関係は別にして，周囲の人々も目にしたことがないほどマドレーヌがとり乱すことが手紙焼失事件後にもあったという一点にかぎるならば，いずれもすでに故人ながら目撃証人としてジャンヌや，彼女とも親しかったアガト・ルアール＝ヴァレリー（当時は未婚）ら数人の名が挙げられているだけに，そしてこれを明確に否定しうる材料がないだけに，軽々しくはあつかえない情報である。ただし，そのばあいでも不審な点が残らないではない。すでに述べたように，シュランベルジェ前掲書を信じるならば，マルセル・ドルーアン夫妻は少なくともマドレーヌが亡くなるまでは，カトリーヌの実父がジッドであるとは予想だにしていなかった。すると彼らの息子ジャックは，母の名を挙げてマドレーヌの極度の苦悩を証言しながら，他方，この苦悩とカトリーヌ誕生との因果関係については正反対の内容をオーセイユに語ったと考えなければならないのか。あるいはこの場景描写には彼の「回想」はもとからまったく関与していないのか。だが，本書冒頭に丁重な謝辞を捧げられた彼が証言してもいないのに，著者が独断でその母を引きあいに

出したとは考えにくいのではないか，などなど……。

かくのごとくわれわれの問いは，明確な回答をうることなく，堂々めぐりをつづけざるをえない。そしてことここにいたれば，あえてつぎのような疑念を表明することさえ許されよう。すなわち，事実に立脚した反論の提出によってではなく，むしろもうひとつべつの新たな神話を創出することで，すでに堅牢に構築された承認しがたい神話に対抗する，それこそが著者と証言者の選択した戦略だったのではないか。そして彼らにとっては，研究者からの批判を呼ぶことはもとより承知のうえだったのではないか。なぜならば，批判が厳しければ厳しいほど，ある意味で新神話の流布には有益だともいえるのだから。さすれば，研究者にとって本書が存在する意義とは，ジッドの結婚生活を語ることの困難を今さらながらに浮きぼりにして見せた点にこそあるというべきなのだろうか[21)]。

註

1）書簡焼失事件の経緯については，つぎの論文に詳しい—— Pierre MASSON, «Les Lettres brûlées, ou le chef-d'œuvre inconnu d'André Gide», *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 78－79, avril-juillet 1988, pp. 71－88. また，この事件以後マドレーヌが亡くなるまでの20年間に彼女に宛てられたジッド書簡にかんしては，それが作家の没後，遺産相続人カトリーヌ・ジッドの手元を離れた複雑な事情を考慮すれば，研究者に閲覧が許されることは当分期待できそうもない（現在の正確な所在さえも不明）。いっぽうジッド宛マドレーヌ書簡のうち，1895年から1909年にかけて書かれた280通については，すでにクロード・マルタンが詳細なリストを作成している（voir Claude MARTIN, *La Maturité d'André Gide. De «Paludes» à «L'Immoraliste»*, Paris: Klincksieck, coll. «Bibliothèque du XXe siècle», 1977, pp. 549－560）。さらに結婚以前の書簡にかぎるならば，次註引用の書簡集において少なからぬ抜粋が関連資料として印刷公表されている。

2）Voir André GIDE, *Correspondance avec sa mère, 1880–1895*. Édition établie, présentée et annotée par Claude MARTIN. Préface d'Henri THOMAS, Paris: Gallimard, 1988, 781 pp.

3）Voir «Le Journal de Madeleine», *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 35, juillet 1977, pp. 5－34, et n° 36, octobre 1977, pp. 6－23. なお，この日記については，つぎの論文が見事な考察をしめす—— Alain GOULET, «Madeleine au miroir: le Journal de Madeleine», *ibid.*, n° 89, janvier 1991, pp. 43－61.

4）Voir Roger MARTIN DU GARD, *Notes sur André Gide, 1913–1951*, Paris: Gallimard, 1951, 155 pp.; Maria VAN RYSSELBERGHE, *Les Cahiers de la Petite*

Dame. Notes pour l'histoire authentique d'André Gide, 1918–1951. Préface d'André MALRAUX, Paris: Gallimard, coll. «Cahiers André Gide», 4 vol., 1973-77, XXXII-464, 672, XII-407 et 327 pp.

5) Voir Max MARCHAND, *L'irremplaçable mari, ou La vie conjugale d'André Gide. Récit*, Oran: Impr. L. Fouque, 1955, 214 pp.

6) Voir Jean SCHLUMBERGER, *Madeleine et André Gide*, Paris: Gallimard, 1956, 255 pp.

7) 新庄嘉章『天国と地獄の結婚——ジッドとマドレーヌ』, 集英社, 1983年, 325頁（初出誌「すばる」1982年12月号）参照。

8) Sarah AUSSEIL [et Jacques DROUIN d'après ses souvenirs], *Madeleine Gide, ou De quel amour blessée*, Paris: Robert Laffont, coll. «Elle était une fois», 1993, 324 pp. + 16 pp. ill. h.-t., ach. d'impr. août 1993.

9) André GIDE-Jean SCHLUMBERGER, *Correspondance 1901–1950*. Édition établie, présentée et annotée par Pascal MERCIER et Peter FAWCETT, Paris: Gallimard, 1993, p. 690.

10) いうまでもなく，この項は「書簡による告白」という本書の誤記を正すためのもの。コポーやシュランベルジェ，マルタン・デュ・ガールについては，早晩ジッドから直接報告を受けたことは各人の証言からあきらかである。

11) 付言すれば，本書には，計16頁にわたり，少なからぬ別丁図版（写真29点と，キュヴェルヴィルの家屋と庭の詳細な見取り図1葉）が収められている。すべてジャック・ドルーアンから提供された，ほとんどが未発表のもので，資料的価値は高い。それだけに，些少であるとはいえ，キャプションの誤りや脱落が認められるのは残念だ。一般的な編集作業の実情を考慮すれば，写真や図版に付された説明のミスはいちがいに本の著者が責めを負うべきことがらではないかもしれないが，読者にとっては，情報の虚偽や不十分という点ではなんら変わりがない。単純な誤りとしては，ジッドがミシェル・ドルーアン少年の肩に手をおき，後ろからかがみこむように彼を見つめている1930年代末の写真において，少年をジッドの「甥」と記していること。彼はジャックの長男（1934年生まれ，存命。本業は中等学校の歴史学教師だが，アンドレ・シュアレスの研究家として著名）で，ジッドにとっては「甥の息子」にあたる。説明の不十分にかんしては，補足をまじえつつ述べれば，以下のとおり——。本書の意図では，映像によってもジッドとマドレーヌとの夫婦関係の温かさを証したいはずだが，不思議なのは2人をともに収めた写真がほとんどないことだ（既知のものについても事情は同様）。たしかに，キュヴェルヴィルの敷地内のテニスコートで撮影されたものが含まれてはいる。だがそれにしたところで，前景に位置するジッドがカメラに顔をむけているのにたいし，後景で腕を組んで腰かけるマドレーヌの視線はまったく別の方向に遠く泳いでおり，偶然の対照にすぎまいが，どこか不吉な印象さえあたえる絵柄となっている。だが本書に収録された写真のなかには，ほかにもう一枚あるのだ。一族の集いを記念した1935年夏の写真がそれである。前に立つヴァランチーヌ（マドレーヌの下の妹）の姿と奇妙に溶けあって，うっかりすると見落としてしまいそうだが，頭部の上半

分と，煙草をもった手先からそれがジッドであることは確実なのに，彼の名だけが書き落とされている。しかも，寄りそって立つのはマドレーヌで，穏やかな表情を浮かべ，頭をこころもち彼のほうに傾けているのだ。キャプションは大書してでも，この点に読者の注意をうながすべきではなかったか。

12) Voir André GIDE – Dorothy BUSSY, *Correspondance 1918–1951*. Édition établie et présentée par Jean LAMBERT. Notes de Richard TEDESCHI, Paris: Gallimard, coll. «Cahiers André Gide», 3 vol., 1979 – 82, t. III, p. 76.

13) Voir GIDE, *Et nunc manet in te*, suivi de *Journal intime*, Neuchâtel et Paris: Ides et Calendes, 1947, pp. 11 – 13; repris in *Journal 1939–1949. Souvenirs*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1954, pp. 1124 – 1125.

14) マリア・ヴァン・リセルベルグがマドレーヌ死去の翌々日（4月19日）ジッドから受けた電話連絡の内容による。Voir Maria VAN RYSSELBERGHE, *op. cit.*, t. III, p. 78.

15) さらに，ジッドの友人でマドレーヌの葬儀に出席したのは実際にはゲオンひとりだけで，本書が名を挙げる「シュランベルジェ，マルタン・デュ・ガール，ヴァレリー」(317頁）は，連絡が間に合わなかったり，旅行中だったりと，それぞれ事情があって参加できなかったことなど，後続部分にも訂正すべき点が多い。

16) Voir MARCHAND, *op. cit.*, pp. 161 – 162.

17) Voir SCHLUMBERGER, *op. cit.*, pp. 244 – 247.

18) 新庄前掲書，235 – 236頁参照。

19) Cf. Maria VAN RYSSELBERGHE, *op. cit.*, t. I, pp. 165 – 166.

20) Voir SCHLUMBERGER, *op. cit.*, p. 247.

21) 結語をおいたあとでは遅きに失した感があるが，かなり信頼度の高い情報が報告されているので，本稿の基本的な論調と若干矛盾することは承知のうえで，紹介しておきたい。マドレーヌはかつて自分たちをすてて出奔した母マチルドを終生ゆるさなかったと一般には信じられている。しかしながら，ジャック・ドルーアンの妻ギーザ（存命）の証言を信ずるかぎりは，マドレーヌの心情は晩年かなり軟化していたようだ。ギーザはジャックと結婚した当初，キュヴェルヴィルでは慇懃ではあるが，どこか冷ややかな応対をうけていた。だが，しだいにマドレーヌにも受け入れられていった。そして1936年のある日，家族から離れて暮らす彼女にマドレーヌはつぎのように語ったという――「電話してさしあげなさい。自由に電話は使っていいから。ご存じかしら，母の臨終のときに駆けつけなかったことが，わたしのもっとも大きな後悔のひとつだと思っているのよ」(310頁)。すでに事情を知っていたギーザは，マドレーヌの告白に唖然とならざるをえなかったという。
さらに付記すれば，本書については，すでに「ル・フィガロ・リテレール」が書評を掲載したことが「ジッド友の会会報」最新号（1993年10月号，実際の発行は1994年1月）の書誌欄に報告されている。残念ながら筆者はこの書評を未見だが，標題から判断するかぎり，否定的な評価を下しているものと思われる―― José CABANIS, «Madeleine Gide: une vie secrète..., prétexte à une biographie ratée», *Le Figaro littéraire*, 1er octobre 1993, p. 3.